

スケフィントン・ラトウィッジとフィップスの「北極航海日誌」

笠井 勝子

ネルソン提督の研究者ポーリン・ハンター・ブレアは2001年3月22日のTLSで、北極航路発見を目的とした1773年の「航海日誌」がチャールズ・ラトウィッジ・ドジスン(ルイス・キャロル)のノンセンス詩の背景にある、と論じていて興味深い¹⁾。ブレアはそのなかで、C. L. ドジスンには母の兄にスケフィントン・ラトウィッジがあり、さらに同姓同名でその親戚筋に18世紀後半の北極航路発見に出た2隻の船の一方の船長を勤めた人がいたことを認めて、ドジスンはおじスケフィントン・ラトウィッジを通じて北極航海日誌の原稿を読んでいたであろう、と推測している。本論では、おじスケフィントン・ラトウィッジおよび、『スナーク狩り』の出版、『スナーク狩り』の背景にあたると思われる部分を「北極航海日誌」から取り上げ、ノンセンス詩の狙いを考察する。

1. おじスケフィントン・ラトウィッジとその死

1873年5月28日、ロバート・ウィルフレッド・スケフィントン・ラトウィッジ²⁾は予想しない事件で世を去った。その名前は、今日思い出されることは稀であろうが、彼は妹であるフランシス・ジェイン・ラトウィッジの長男チャールズ・ラトウィッジ・ドジスン(ルイス・キャロル)にはきわめて親しい存在であった。スケフィントン・ラトウィッジは、1802年にカンバーランドのホームルーク出身の父チャールズ・ラトウィッジと母エリザベス・アン³⁾の間に二男としてロンドンで生まれた。ケンブリッジのセント・ジョン・カレッジで学び、1824年にB.A.を、1827年にM.A.を取得し、同年7月3日にロンドンの4法曹学院の一つリンカンズ・インから法廷弁護士資格を受けた。1835年4月には新設のダラム大学を視察して、首相ロバート・ピール宛に大学が満足できる状態にあるとの報告⁴⁾を送っている。内容は入学した学生はみな大学の規則をすべて遵守していること、なかでも大聖堂での礼拝には毎日出席し、神学の講義を受けていること、神学の講義には国教会の定める規定と信仰箇条が入っており、各学期末には神学の試験が課せられていること、教育課程と学内規則はすべて教会の規則にのっとっておこなわれていることを述べている。さらに、学位は神学の試験に合格したのちに授与され、取得のためには寄付金がかかること、学士号第1号はオクスフォード大学から移籍してきた学生にこの年授与される予定で、前大学に在籍した学期を現大学でもそのまま認めていることも付け加えている。

スケフィントン・ラトウィッジは1842年から45年、および1855年12月25日から死去するまでヴィクトリア女王が任命権を持つ精神病院査察官の役についていた。各地の精神病院を定期的に巡回し、患者の話聞き、病院の管理状態を査察するのが役目であった。1845年には、政府の精神病

院監督委員会の委員長に任命され、1856年9月にはアイルランドの精神病院監督官にもなった。

ラトウィッジは音楽好きであったのか、西ヨークシャー区精神病院 (West Riding Asylum) の患者のために125頁の合唱歌集を編纂⁵⁾している。カメラ、望遠鏡、顕微鏡、という当時は先端の新しいものを手に入れて、学生時代にオクスフォードから訪ねてくる甥のドジスを喜ばせた。1873年5月、精神病院を査察の最中に予期しない事件が起きた。彼の甥チャールズ・ドジスの日記によってそのときの様子を見ると、ドジスのもとには1873年5月21日にウィルクス氏から最初の知らせが電報で届いた。ドジスはすぐにおじのいるソールズベリへ向かうが、おそらく列車の接続のせいであろう、途中のベイジングストークに一泊する。

Telegram from Mr Wilkes at Salisbury that my Uncle Skeffington has been injured.
Left Oxford 8.15 and slept at Basingstoke.

ウィルクス氏とはジェイムズ・ウィルクス博士のことで、彼はフィッシュヤトン・ハウス精神病院の査察のためにスケフィンソン・ラトウィッジと共に、ソールズベリに来ていた。

翌5月22日の日記は、外科医のコーツ氏とジェイムズ・パジェット卿がラトウィッジの治療に当たっていることを書いている。原因は精神病患者に殴られたもので、外科医のパジェットは急遽ロンドンから呼ばれた。日記にはそれ以上詳しい事情は書かれていない。おそらく書けなかったと思われる。

Reached 'White Hart,' Salisbury, at 10, and learned that Uncle Skeffington had been struck by a lunatic. Saw Mr Coates (surgeon) and Sir J. Paget.

Telegraphed for Fletcher, who arrived at 8 p.m.

「ホワイト・ハート」(白鹿)は、おじスケフィンソンが運び込まれたホテルである。フレッチャーは、スケフィンソン・ラトウィッジの兄チャールズ・ヘンリー・ラトウィッジの息子チャールズ・ロバート・フレッチャー・ラトウィッジのことで、ドジスには従弟にあたる。

その翌日の5月23日に病状は回復していると思われて、ドジスは一旦オクスフォードへ戻った。

Uncle Skeffington better, left for Ch. Ch. Edwin joined me at Reading (he going {sic.} to Birmingham).

エドウィンはドジスの末の弟である。従弟のフレッチャーはそのままおじのそばに留まった。5月28日になってフレッチャーから電報が届いた。

Telegram from Fletcher. Went to Salisbury, joining Sir J. Paget on way, we arrived a few minutes after my dear Uncle's death. (Aunt Lucy and Fanny were there).

一旦引き上げていたドジスンとパジェットが駆け付ける数分前に、おじスケフィンソンは息を引き取った。72歳であった。しかしまだ非常に元気な人であった。ルーシーはスケフィンソン・ラトウィッジの妹で、ファニーはドジスの長姉である。

死因は精神病患者から受けたこめかみへの一撃によるもので、傷は脳にまで達していた。ラトウィッジは病院の女性病棟と男性病棟をジェイムズ・ウィルクス博士と共に見て回り、別棟にいる男性病棟で患者たちの話を聞いてのち、ウィルクス博士よりひと足先に外へ出るところであった。そこへ突然マッケイヴという患者が襲いかかった。一瞬のできごとであった。1873年6月3日付の地元紙The Wiltshire County Mirrorは同僚の査察官ジェイムズ・ウィルクス博士の証言として、次のように伝えている。

'I came with Mr. Lutwidge to inspect Fisherton House Asylum yesterday week. Having finished the female department, and also the pauper male department, we visited a detached ward, in which McKave was a patient. I cannot say whether Mr. Lutwidge addressed any remarks to him. I talked to several of the patients - to one especially - for some time. We checked each name with a book of our own, so as to satisfy ourselves that we had seen every patient. Mr. Lutwidge had been listening to complaints from one of the patients, and was preceding me out of the ward by two or three yards - in fact he was outside the door - when I observed a scuffle. I saw Mr. Lutwidge put his hand to his head, from which blood was flowing - from the right temple..... At first I thought it was merely a blow from the fist, but on going up, I found that a nail had been taken from McKave with which he had inflicted a wound. I did not hear any exclamation. Mr. Lutwidge would have fallen down if the wall had not supported him⁶⁾.

犯人はアイルランド人でマッケイヴといった。彼は狂気のため犯罪を犯して20年前から強制入院の措置を受けていた。病院内ではその間騒々しい患者ではあったが凶暴な行動をとったことは一度もなかった⁷⁾。したがって彼がどうしてスケフィントン・ラトウィッジを目掛けて突然襲い掛かったのか誰にもわからなかった。記事にあるその他の証言によっても、その日二人が話をしたとか目が合ったということはなにも分っていない。スケフィントンの遺体は検死の後ロンドンの自宅へ運ばれた。5月31日のドジスの日記には、

We all went to 101 Onslow Square.

とある。スケフィントン・ラトウィッジは、1865年からロンドンのオンズロー・スクエアに住んでいた。葬式は6月3日におこなわれた。式後オクスフォードに戻ったドジスは、翌日、おじの親しい友人で隣人でもあったミルマンへ葬儀への列席に対する礼状を出した。従弟のフレッチャー・ラトウィッジがミルマンに直接の面識がなかったため、彼に代わって書いたもので、当日は馬車の座席に余裕がなく、式後に家で開いた故人を偲ぶ集まりには親族だけが出て、ミルマンのような故人の親しい友人を招くことができなかったということへの詫びを述べた⁸⁾。ヘンリー・サラズベリ・ミルマン (Henry Salusbury Milman 1821 - 93) はイナーテンブル出身の法廷弁護士であった。

2. 『スナーク狩り』執筆の動機

スケフィントン・ラトウィッジの死後3年目の1876年3月にチャールズ・ドジスはマクミラン社から『スナーク狩り』を出版した。この詩のきっかけは、ギルフォードにおいて従弟のチャールズ・ウィルコックスを徹夜で看病した後、サレーの丘を散策していたときに頭に浮かんだ、「というのは、スナークはブージャムだったのだからね」というひとことに端を発し、それは『スナーク狩り』の最後の1行になった。このときドジスは42才で、同年11月23日の日記には、ヘンリー・ホリデイが「ブージャムの絵を描いて木版にしてくれた」ものをラスキンに見せたことが書かれている。ベイカーが港に積み残して忘れた42の荷物はドジスの年令と同じ数であり、ベイカーが語る「おじの最後のことば」は言い換えれば「おじの死」を表わしているとも考えられる。

モートン・コーエンは *Lewis Carroll Observed* (1976年) のなかで「結核を患っていたチャールズ・ウィルコックスを夜の間に看病していたその辛く息苦しい現実から逃れる」ために散歩に出て、明るいサレーの丘で閃いたひとことを手がかりにして、やがて生まれてきたのがこのノンセンス詩であると述べて、1874年のドジスの動静とチャールズ・ウィルコックスとの関わりについて述べている。6月にはワイト島のサンダウンに出かけたドジスは、帰途ギルフォードのチェスナッツ屋敷に立ち寄ってオクスフォードに戻った。そのときウィルコックスは北のウィットバーンの故郷を出てドジスの姉妹が住むチェスナッツに身を寄せていた。結核の療養には南フランスやイタリアへの転地療養がよいと考えられた時代だが、経済的余裕がなかったためか、代わりにロンドンの南にあるギルフォードの親戚の家に世話になった。ドジスは7月17日には再びギルフォードへ、今度は病人の看護をするために訪れた。チャールズ・ウィルコックスはその後、ドジスに伴われて南のワイト島へ療養に行き、1874年11月10日にそこで亡くなった。

1962年、すなわちコーエンの *Hark the Snark* という論考から遡って14年前に、マーティン・ガードナーは *The Annotated Snark* のなかで、ヘンリ・ホリデイが書いた *The Snark's Significance* から引用して、『スナーク狩り』への挿絵の依頼を受けたとき、ドジスからはまず初めの3節が届き、間もなく第4節、同様にして第5節と続き、これに第6、第7、第8節が続いてきた、というホリデイのことは紹介している。ドジスは初めこのノンセンス詩を『シルヴィとブルーノ』の中に入れることを考えていたが、着想はどんどんとひろがりできあがってしまった。そこで、『シルヴィとブルーノ』の完成を待たずに単独で出版することに決めたのだ、とホリデイは書いている。コーエンは *Hark the Snark* のなかで、『スナーク狩り』のなかで作者が探し求めていたのは苦痛からの解放であり、サスペンスと笑いによってそれを果たした、としている。

Surely it is not entirely accidental that *The Hunting of the Snark* moves away from the world as we know it into a mythical, unreal world, that it destroys the natural succession of things, renounces logic, and violates all reasonable expectations. Just as Dodgson's first inspiration is the last line of the poem, so he builds the work of art, as it were, backwards. And with parallel illogic, the ship that takes the band of eccentric creatures on their Snark hunt also makes its journey backwards. Time, place, purpose are irrelevant; meaning there is none; all that matters is relief, which Carroll achieves through suspense and laughter⁹⁾.

苦痛からの解放とは、不治の病に衰弱していく従弟の苦痛からの解放であり、またそれを枕元で夜を徹して看病をする者の辛い苦痛からの解放、ということである。コーエンはさらに、繊細な詩人の魂をもったドジスにとって堪え難い現実からの解放でもある、と書いている。しかし、看病の苦痛からの解放はサレーの丘の散歩で癒されるであろう。ノンセンスの詩作には他の動機付けもあったのではないか。

3. おじラトウィッジとフィップスの「航海日誌」

2001年3月22日付けのTLSで、ポーリン・ハンター・ブレアは、北極航路発見を目的としたフィップスの「航海日誌」がドジスのノンセンス詩に着想を与えた、と論じて興味深い。北極を通過してインド、そして日本へ向かうという計画は、英国にとって喜望峰を経由するよりも短時間でできる安全な航路の発見と考えられ、早くは16世紀初めから提起されていた。18世紀後半になる

と、香辛料を手に入れるという実利のみならず、地理上の計測、気象観測、高い緯度における実験、それに北極点へ至る航路発見という期待をもって、国王ジョージ3世が提唱した。

ブレアは、ドジスの母方のおじスケフィントン・ラトウィッジの手元にその当時の記録が伝わっていたのではないかと考えている。スケフィントン・ラトウィッジには同名のおじがあり、そのおじからさらに1代遡って、後に海軍大将になったスケフィントン・ラトウィッジという人物があり、この人が北極行の2隻の船の内の1隻の指揮をとっていた。その北極航路発見の「航海日誌」がドジスのノンセンス詩に素材を提供している、とブレアは考える。

ノンセンス詩の素材がどこにあったか、という論考は興味をそそる。北極点の発見と、そこを通過してインド、日本へ至る航路の発見という夢は今日では奇抜に聞こえるが、18世紀の島国英国はその可能性を探っていた。「航海日誌」は1879年にマクミランから出た*Northward Ho!* に Captain Albert H. Markham の編纂で収録された。これはドジスの『スナーク狩り』出版から3年後のことである。したがって、*Northward Ho!* を通して北極航路の冒険話が『スナーク狩り』にソースを提供したということにはならない。*Northward Ho!* の編者マーカムは、序のなかで「友人がその先祖の書いた古い航海日記を自分の手に預け」、それに目を通していうちに是非出版をしようと考えた、と書いている。この序によればマーカムは手書きの日誌を元にして編集している。実は、その「古い航海日誌」が航海がおこなわれた年、1773年に *Voyages Round the World by English Navigators* が出版されたとき、その第4巻目はどうにか間に合って補遺として掲載されていた。*The Journal of A Voyage undertaken by order of His Present Majesty, for making discoveries towards the North Pole by The Hon. Commodore Phipps and Captain Lutwidge in His Majesty's sloops Racehorse and Carcase* がその補遺のタイトルである。

この1773年の「序」には北極点を經由して東インド諸島へ至る航路発見の構想は、古くは1527年にプリストルのロバート・ソーンという商人がヘンリ8世に提案したという記録を挙げて、フィップス自身が挑戦する1773年まで250年の間の先人の試みが列挙されている。ソーンはヘンリ8世の他にリー博士にも提案をして勧め、そのなかで、英国から香辛料の国までの航路は2千リーグ以上も短縮することができる、とその実利性を挙げた。1607年になってヘンリ・ハドスンが北極点経由で日本と中国への航路発見を試みた。1609年3月1日にはトマス・スミス卿がブラックウォールから出航したが、失敗。スミスは1611年にも再び50トンの船で航路探しを試みている。1614年にはパフィンとフォザビーの二人が取り組み、フォザビーは翌1615年20トンの船で再び挑戦している。以上はいずれも個人のおこなった実利目的の冒険であった。この後150年の間にそのような試みはなく、1773年になって初めて国王の命のもとに北極点への航路発見の航海が実現することになった。その使命のために逸早く名乗り出たのがコンスタンティン・フィップスである。先人たちの過去の記録を調べたフィップスは念入りな準備をおこなった。アーヴィング博士の考案した海水から真水を蒸留する器具を積み込んで、これはうまく作動した¹⁰⁾。厳しい気候や疲労対策には余分のアルコールを積んで、指揮官の判断で乗組員に配ることにした。厳寒の気象状況に備えて衣類を積み込み、緯度が高い水域に入ってから乗組員に与えることとした。

こうして1773年5月26日に北極への航路探検の目的で「レイスホース号」と「カーカス号」の2隻の船が英国から出発した。前者はフィップス提督が、後者はスケフィントン・ラトウィッジ船長が指揮をとった。後のネルソン提督は、この時まで10代の海軍見習い将校としてラトウィッ

ジ船長の率いる「カーカス号」に乗組んだ。

ブレアはドジスのノンセンス詩、とくに『スナーク狩り』の第3節に、18世紀の北極への航海日誌との類似点を見出し、その論考を第3節と同じく「ベイカーの話」と題している。『スナーク狩り』の「ベイカーの話」は未知の航海に出るベイカーに向けておじが忠告を与えるものである。すなわち、「ふつうのスナークは害がないがブージャムには注意するように。ブージャムを見たものは、突如、そのまま消えてしまう」と。北極への航海日誌によれば、氷原に降り立つと足下には雪に隠れて見えない裂け目があちこちにあった。いったんそこに足を踏み入れたものは周りの者がどうしようと助けようがない。ブージャムに出会った者が音も無く突然消え去るのは、氷の割れ目に落ち込むのにも似ている。

‘Our journalist found it very dangerous to pursue his way over the hills and precipices in this rugged country. The clefts on the mountains are like those in the ice frequently more hazardous, being sometimes concealed under the snow, so that a traveller is engulfed before he is aware. Many have been entombed in these clefts, and perished in the hearing of their companions, without a possibility of relief’.

「ベイカーの話」のおじはブージャムについて、

‘But oh, beamish nephew, beware of the day,
If your Snark be a Boojum! For then
You will softly and suddenly vanish away,
And never be met with again!’

そのことばのとおりベイカーはスナークに出会い消えていく、

They beheld him — their Baker — their hero
 Unnamed —
On the top of a neighbouring crag,
Erect and sublime, for one moment of time.
In the next, that wild figure they saw
(As if stung by a spasm) plunge into a chasm,
While they waited and listened in awe.

『スナーク狩り』の挿絵を引き受けたホリデイは、病の床から忠告をする叔父の部屋の窓から見えるところに、ベイカーが船に持ち込む予定の荷物の山を置いて最後の箱に42の数を書いた。42の荷物の山は、結局、港に積み残された。北極点への航海に出発するときには*The Journal of A Voyage undertaken by order of His Present Majesty, for making discoveries towards the North Pole* 第4巻補遺の冒頭では、ラトウィッジ船長率いるカーカス号は積み荷が重すぎて喫水線が上がりすぎているために、乗員10人と6ポンド砲6門を船から下ろして出航する、ということが起きていた。

On the 3rd of June 1773, the Commodore made the signal to weigh, but previous to their departure, the Carcase having been judged too deep to navigate those heavy seas through which she was to pass, the Captain obtained leave from the board of Admiralty to re-land ten of her compliment of men, and to put a shore six of the eight six-pounders with which she

was equipped, with a quantity of provisions proportioned to the number of men that it had been thought proper to discharge.

同じできごとを1879年の*Northward Ho!* は、次のように描写している。

Materials for experiments were so numerous and weighty, as not only to lumber us a good deal, but to occasion us to swim very deep in the water. The adorning of the ship, which at another time might have been an object to us, was now none. All our contrivances were to make her useful, not beautiful!¹²⁾

1773年の航海にはこれまで例のない装備と乗員を整えた。ベンティンク船長が改良しコール氏が制作した鎖ポンプ。緯度の高いところで第二振子の長さの実験をするためにグレーム氏が実験に使ったのと同じの振子をカミング氏に依頼して借りて積み込んだ。緯度委員会は緯度の記録をとるために2種類の時計を支給してくれた。一つはハリスン方式によってケンダル氏が制作したもの、他はアーノルド氏が制作したものであった。また研究者として乗り組んだイズラエル・ライアン氏は天体観測の専門家で、彼の数学の知識は世間によく知られているところであった。こうして今回は従来の航海とは異なり、学術的な研究をも目的とする航海になっている。北極航海に同行したイズラエル・ライアンが数学者でもあったことは、『スナーク狩り』に算数の計算問題が出てくることと符合する。

航海のために積み込んだ計測器材を知ると、新しいもの好きだったドジスンのおじスケフイントンが1773年の「航海日誌」に特に興味を持ったであろうことは想像がつく。カーカス号の船長ラトウィッジから、同名の甥を経て、またその同名の甥でドジスンのおじであるスケフイントン・ラトウィッジの手に航海日誌が伝わっていたのではないか、というブレアの指摘は単なる推測とは言いきれない。またラトウィッジにとって自分が生まれる30年ほど前の自分と同名の親戚の者が体験した冒険話が、おじを通して語り継がれたということはじゅうぶんにある。

日誌によれば6月12日には、It was now light enough all night to read upon deck. と一晩中デッキでもものが読める明るさだった。北極圏で見られる「真夜中の太陽」である。これはドジスンのもう一つのノンセンス詩、「せいうちと大工」の書き出し部分を想起させる。

'The sun was shining on the sea,	おひさま海に照っていた
Shining with all his might:	精いっぱい照っていた
He did his very best to make	一所懸命に照りつけて
The billows smooth and bright --	波なめらかに光らせた
And this was odd, because it was	ところがこれは変だった
The middle of the night.'	というのも時は真夜中だった

6月24日には海水から真水を蒸留する装置を試してみて、塩分のない水が1日平均で34乃至40ガロン得られることが分かり、乗組員一人あたりにして1クォート以上の分量になるため非常の場合はサバイバルに十分である、と計算している。

6月29日にはチャールズ・キャヴェンディッシュ卿の考案による水温温度計を使い、水深118尋の水温が華氏31度であることを計測した。

『スナーク狩り』第3節の最初の1行目にmuffins という語が出ている。

'They roused him with muffins - they roused
him with ice -

何故マフンなのかという疑問に答えるのが、7月26日の「航海日誌」に出てくるスピッツベルゲンの北方にある小さな島、Moffin's Island である。この島を乗組員たちはmuffins と同じ発音で口にしていて、とブレアは推論している。

'On the 26th we were pretty nearly as far east as Moffin's Island, which we now saw on the starboard bow about four miles off, and further than which no man, who speaks truth, ever was⁹⁾!

マーティン・ガードナーは、*The Annotated Snark* のなかの次の計算問題を x を用いて式を書き¹⁰⁾、その解は常に x である、と解いた。

Taking Three as the subject to reason about —

A convenient number to state —

We add Seven, and Ten, and then multiply out

By One Thousand diminished by Eight.

“The result we proceed to divide, as you see,

By Nine Hundred and Ninety and Two:

Then subtract Seventeen, and the answer must be

Exactly and perfectly true.

実は『スナーク狩り』においてこの x はゼロである。解はゼロ。無である。無こそ完璧な真 (the answer must be Exactly and perfectly true) と語っている。

1773年の北極航海から奇しくもちょうど百年目にあたる1873年に突然に襲ったおじスケフィントンの死で、人生の果てはゼロ、無である、とドジスは、考えたのではないか。

Notes :

- 1) TLS March 2 2001, p.14 - 5.
- 2) Robert Wilfred Skeffington Lutwidge (1802-1873)
- 3) 旧姓ドジスン。彼女の父はアイルランドのエルフィン司教チャールズ・ドジスンである。
- 4) 横11.5cm×18.5cm 横×2の二つ折り、14行、黒インクで、細い美しいやや女性的な handwriting. (*Peel Papers* Vol. CCXXXIX)
- 5) *Glees, Madrigals, Miscellaneous Part Songs & c. used at the West Riding Asylum* pp.125 (British Library 所蔵、出版年不明。楽譜はなく、歌詞のみを集めた。)
- 6) *The Wiltshire County Mirror*, Tuesday, June 3, 1873. P.6.
- 7) *The Salisbury and Winchester Journal*, p.8. 24 May, 1873.
- 8) *The Letters of Lewis Carroll* vol. 1, p. 189. Morton Cohen ed., 1979.
- 9) *Lewis Carroll Observed*, p.95. Edward Guiliano ed., Clarkson N. Potter, 1976.
- 10) Introduction, p.11.
- 11) p.91.
- 12) *Northward Ho!* p.104. この書では各頁の頭にその頁の内容を要約した見出しが付いている。上記104頁には、Beautiful Ship Dispenced With と付いている。

13) *Northward Ho! Chapter VIII*, p.168.

14) *The Annotated Snark*, p.71, M. Gardner, 1962. $\frac{(x + 7 + 10)(1000 - 8)}{992}$ — 17

References:

‘Baker’s Tale’ by Pauline Hunter Blair , TLS March 2 2001,

Peel Papers Vol. CCXXXIX

Glees, Madrigals, Miscellaneous Part Songs & c. used at the West Riding Asylum

(British Library 所蔵、出版年不祥。)

The Wiltshire County Mirror, Tuesday, June 3, 1873. p.6.

The Salisbury and Winchester Journal , 24 May, 1873.

The Letters of Lewis Carroll vol. 1, Morton Cohen ed., 1979.

Lewis Carroll Observed, Edward Guiliano ed., Clarkson N. Potter, 1976.

Northward Ho! Captain Albert H. Markham ed., Macmillan, 1879.

The Annotated Snark, Martin Gardner, Simon and Schuster, 1962.

Journal MS Charles Lutwidge Dodgson, British Library.

